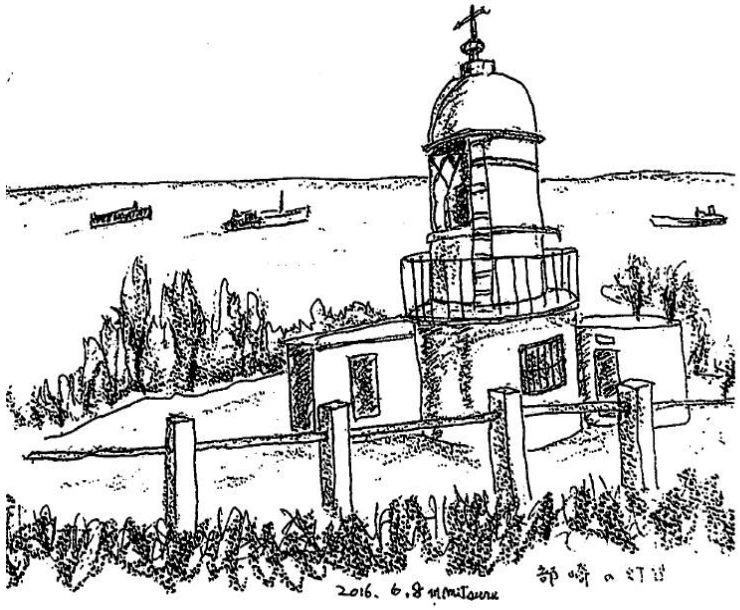
週報２０２１年６月20日



2021年教会標語聖句

見よ。わたしは新しい事をする。
今、もうそれが起ころうとしている。

イザヤ書４３章１９節

シオン教会信仰指標：“イエス様と共に歩む”

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

北九州シオン教会

牧師：山崎銀次郎　http://jesus.holy.jp/

〒800-0038 北九州市門司区大里原町 6-10

TEL 093-381-4395(FAX…4396)

牧師携帯　090-6737-5276

礼拝順序　2021 年６月２０日

司会・奏楽・メッセージ　山﨑銀次郎 牧師

（オンライン礼拝）HP アドレス：http://jesus.holy.jp/

祈祷	開会の祈り
信仰告白	使徒信条･標語聖句唱和
賛美	コーラス 36「土の器」
祈祷	＊今日までのめぐみに感謝し、新たな献身を祈りましょう！＊
聖書朗読	詩篇126篇1－6節
説教題	「帰還と再建、そして回復に向かって」
祈祷	御言葉の応答の祈り
祈祷	祝福と派遣の祈り

交わりの三省

＊互いに愛し合っていますか

＊互いに赦し合っていますか

＊互いに祈りあってますか

説教要約

詩篇 126 篇 1－6 節
「帰還と再建、そして回復に向かって」

①喜びの叫びをあげる理由

この詩はイスラエルの民がバビロン捕囚から自国へ帰還した際に作られたという説が有力です。そこでポイントになるのが、「喜びの叫びで満たされた」という心情を詩にしている所です。彼らはこの“帰還”を単に当時の支配者ペルシャ王クロスの政策（解放）と捉えていません、主が（一節）約束の地へ返して下さったと賛美しているのです。

端的に言うなら、帰還したイスラエルの民は“神の時”を信頼していました。これが前回学んだ、“いかなる時も神の介入をまち望む”と同義語です。つまり、捕囚と言う苦難の時でさえ、主の時を待ち望み続けた民が体験した主の解放。そして喜びと叫びの詩。これが詩篇126篇の全容です。彼らが悲惨な経験の中で学んだことは、主を待ち望み続ける事、礼拝する事です。

聖書が言う、喜ぶ人には必ずと言っていいほど特徴があります。それは“祈る人”です。言い換えると（涙と共に）祈る人がわかる、喜びの叫びがあります。詩篇126篇は神の時がやって来ても、単なる“偶然”や“幸運”として結論づけてしまわない為に、祈りと賛美の重要性が書かれています。私達が日々の生活の中で喜びの叫びをあげる為に必要な事は、主が必ず報いて下さると、信頼を止めないことです。

②変えられた繁栄の意味

詩篇の真骨頂は“繰り返し”です。韻を踏む事、つまり詩から発せられる言葉の響きを繰り返すことで伝えたい意味を強調しています。それを踏まえて126篇編4節を見ると、1節の内容（シオン（イスラエル）の繁栄を神に願う祈り）を再度強調しています。自国への帰還を喜んだイスラエルの民が再度、何の繁栄を願うのでしょうか？

彼らが再度願った事は、散らされた或いは、バビロンに残った同胞がイスラエルに帰ってくることです。最初に帰還した民の人数は約5万人と言われています。これはイスラエルの最盛期といわれたダビデ王朝の1パーセントとの人口と言われています。注目に値する事はイスラエルの民にとって、捕囚前と捕囚後で“繁栄の意味合い”が変わっている事です。この時、彼らが求める繁栄とは神を中心とした礼拝の民が増し加わることです。

信仰の大敵は“喪失感”です。旧約の王政の時代、王を中心とするイスラエルの民は人数＝力だと錯覚しました。その結果、武力や権力に依存する国に変わって行きました。聖書が私達に教えている事は一つです。魂の復興です。つまり、人生に介入され、全ての責任を持つ神様に依存する事を意味します。私達が願う繁栄とは、神が永遠に共にいて下さる事に心を合わせ、支え合う仲間が日々増し加えられることです。

③回復は神の御業

詩篇126篇は様々なテーマによって織り成されています。その一つが“回復”です。4節のネゲブ（川）の流れの話、そして有名な聖句、涙と共に種を蒔く者の例えは共通点があります。それが神によるイスラエルの回復です。ネゲブの川は雨が降らない乾期では、ただの大きなくぼみのある水溜です。雨期になり、大量の雨が降る事によって川になります。

5節、6節も韻を踏んでいます。つまり同じ意味です。御言葉の種を蒔く人は、必ず大きな束（収穫）をもたらす事を作者は強調しています。※喜びの叫びと共に！このように詩編126篇を貫いているテーマはイスラエルの回復は神の御業です。

つまり、詩篇126篇が私達に教えている事は、“神と働きを共にする”と言う事です。私達が自分の不完全さに打ちのめされ、抱いた夢が儚く終わり、虚無に悩まされ事があります。しかし満たす方に目を注ぎ、神に寄り頼む時、私達という器は神の愛に満たされて行きます。器は自分で補修したり、磨いたりするのではありません。源泉から来る泉（愛）と種（御言葉）によって造りあげられていくのです。私と言う器から流れる神の愛が、一人の隣人を救いに導き、近隣の人々の慰めとなり、私達の住む世界の命の糧になります。共に主を見上げ、前進してまいりましょう。大きな魂の収穫を夢見て。